

協働学習スペースを活用した授業が学習者の自己効力感と ICT の必要性に与える影響

石井研司*1

Email: kishii@tsuji.ac.jp

*1: 辻調理師専門学校 教務課・辻静雄料理教育研究所 研究部門・九州大学大学院 人間環境学府

◎Key Words 自己効力感, 初級英語学習者, 協働学習

1. はじめに

教育現場ではデジタルデバイスの使用や教育コンテンツのデジタル化が加速しており、それに対応すべく適切な授業内容や到達目標の設定、授業デザインの設計などを再考する必要性が生じている。特に英語教育に関してはオリンピックの開催に向けた動きもあり、英語表記の標識やインバウンド用の事業者用ハンドブックの共有などが展開されている。そこで注目すべきが ESP である。

ESP (English for Specific Purposes) とは、学習者がある特定の目的を達成するために使用する英語のことを指し、特定のタスクを遂行できるように手助けする言語教育の一つである(寺内・山内・野口・笹島, 2010)⁽¹⁾が、上述の通り今後専門料理店(割烹や料亭など)で必要性があるにもかかわらず、料理や調理を専門とする学習者を対象にした研究は、十分になされてきたとは言い難い。

2. 研究背景

2.1 初級英語学習者の自己効力感

自己効力感とは、個人がある状況下でタスクを遂行できるという期待や予測である。その自信が学習意欲に大きな影響を与えることが分かっている(Schunk, 1985; 伊藤, 2008)⁽²⁾⁽³⁾。石井(2014)⁽⁴⁾は、特に英語を苦手とする学習者は、学習経験中に自己効力感を育む機会が十分でない等の理由から英語に対する学習意欲が低下しているが、協働学習などによって改善できる可能性を指摘している。牧野(2013)⁽⁵⁾も、様々なアプローチで教員が授業タスクなどを工夫すれば、初級英語学習者の自己効力感が高まることを授業実践の報告から示唆している。

2.2 授業内での ICT を活用した経験値

ICT の活用においては、吉田・松田・上村・野澤(2008)⁽⁶⁾が ICT の活用により学習者の自律的学習を促進する可能性があることを言及しており、携帯端末を使ったモバイル学習も新たな媒体となりうることも研究で分かっている(Cavus&Ibrahim, 2017)⁽⁷⁾。

一方で IT を使いこなせる教員が現場にいない、または IT 環境が整備されていない、といった現実的な問題もあり、授業内で IT を使った経験がない学習者も往々にしていることが推察できる(重田, 2014)⁽⁸⁾。

2.3 リサーチクエスト

英語学習において ICT の使用が推進されているものの、

デジタルデバイスの使用が学習者の自己効力感にどのような影響を与えているのかは、ESP の文脈において十分検討されていない。さらに ICT を授業で利用することで必要性を感じるかを検討し、今後の授業デザインの判断材料とする。

そこで本研究では、協働学習スペースと呼ばれるプラットフォーム上での学習活動が自己効力感と ICT の必要性におよぼすかを検証する。

3. 方法

3.1 調査協力者

二年制または三年制の専修学校に通う「料理のための外国語(英語)」を受講している 143 名、5 クラスを対象にした。本授業は、プレイスメントによる習熟度別にはなっていないが、事前の聞き取り調査から留学生を含めた 8 割を超える初級英語学習者が受講していた。

全 5 クラスとも Surface または Mac Book を入学時に購入していた。他科目では予復習の教材が教員作成のプリントおよび e-learning となっていたことからモバイル学習も含めた IT の利用に抵抗がないと判断された。

3.2 調査期間

2017 年 4 月の授業初回から 8 月末までの 15 週間で実施し、質問紙は授業初回と期末試験後に回答を求めた。

3.3 手続き

- ① クラス選定: 1 クラスは専任教員が授業登壇しており、本研究の趣旨を理解し円滑に進めやすいと判断したため、協働学習スペースを活用する授業対象とする有クラスとし、協働学習スペースを一切活用しない残りの 4 クラスを無クラスと設定した。
- ② 授業設計: 有クラスでは、授業内で取り組む課題は協働学習スペースを活用するように最大限設計したため、学生たちは常に PC を持参し授業参加する必要があった。無クラスでは、基本的には紙をベースに配布物やワークシートに取り組み、単語調べや情報収集、プレゼンテーションソフトウェアの使用といった限定的な場面でのみ PC の使用を許可した。
- ③ 質問紙: 自己効力感に関しては、水本(2011)⁽⁹⁾、石井(2015)⁽¹⁰⁾を参考に、一部の文言をわかりやすく修正した。全 12 項目で構成し、1 (非常にあてはまらない) から 6 (非常にあてはまる) の 6 件法で

回答を求めた。ICTの必要性に関しては、従来の紙ベースよりもパソコンやiPad、携帯の使用を伴う授業課題の方がいい、従来の紙ベースよりもパソコンやデジタル機器を使った学習活動の方がいい、といった4項目を上記と同じ6件法で作成した。

- ④ 分析:欠損値を除く有効なデータ137名分を対象に、SPSS 24を利用して対応のあるt検定を行った。

4. 結果

まず自己効力感は、文脈・状況に依存したものが存在すると指摘されており、本研究では「勉強をする際」と限定しているため、自己効力感の下位尺度を想定していない。したがって因子分析は行わずに分析を進め、当該尺度の信頼性は、 $\alpha=0.888$ であったため内的整合性が十分であると判断した。ICTの必要性についても確認し、他の項目と相関の低かった1項目を削除し、 $\alpha=0.863$ と内的整合性が確認できたので、ICTの必要性尺度として採用した。

協働学習スペース有群の各因子のプレ・ポストの得点に差があるかを確認するためt検定を行った結果、有意差はみられなかった(表1参照)。協働学習スペース無群の各因子も同様に処理した結果、自己効力感では有意差が見られた(表2参照)。

表1 協働スペース利用有群の基礎統計量

n=15		M	SD	t	p
SE	Pre	37.73	9.01	0.733	n.s.
	Post	36.07	7.27		
ICT	Pre	10.8	4.02	1.836	n.s.
	Post	8.47	5.2		

SE=自己効力感, ICT=ICTの必要性

表2 協働スペース利用無群の基礎統計量

n=122		M	SD	t	p
SE	Pre	39.62	10.38	-5.893	***
	Post	44.74	10.28		
ICT	Pre	9.22	4.41	0.422	n.s.
	Post	9.02	4.57		

*** $P<0.001$

5. 考察

5.1 自己効力感への影響因子

協働学習スペースを使うことで学習者の自己効力感が高まることは確認できなかった。対象となった授業では、確かに協働学習スペースを使うように授業デザインされ、アクティブ・ラーニングを主軸にしたタスクなどで満足感を得られるようになっていた。しかし、成果物は学生同士の協働吟味・評価で、達成感や満足感を得られても、それが本当に正しいのかは判断がつかない状況でもあった。また作業効率の高さと少人数という環境を有効活用したい教員が、必要以上に課題の量を増やすこともあり、学習者が負担を感じていた

可能性がある。そういった他の要因が自己効力感の高まりを阻害したかもしれない。

一方無群では、自己効力感が高まったことが示唆された。受講者の数が30人でありながら英語のパフォーマンス評価という実践的な側面であったため、あまり多くを学習者に求めず、授業内で完結するように課題設定をしていた。最低限の課題量であったことがもしかすると自己効力感が高まった要因かもしれない。

5.2 協働学習スペースの利用意義

有群では、協働学習スペースを課題の提出場所や提出課題の編集、クラスメイトとの協働作業スペースとして価値を見出し、授業時間内外いつでもアクセスできるといった恩恵が授業参加者全員にあった。ただし、学習者は毎回使うことにマンネリを感じたり、プラットフォームを使った授業展開といった未経験の活動に面倒くさいと思ったりした学生がいたことは否めない。また、途中でPCの電池がなくなり課題が頓挫する、ネットワークトラブルによりアクセスや同期が出来ずにやる気を挫かれる学生もいた。そうした経験が積み重なり、ICTの必要性を感じなかったのかもしれない。

一方無群は、必要な時にだけPCを使い、ネットワークやアクセストラブルなどに遭遇する機会が少なかったものの、授業内で期待したほど使用しなかったことも一因してか、あまり必要性を感じなかったのかもしれない。

6. おわりに

本研究では、協働学習スペースを活用することで学習者の自己効力感とICTの必要性が変化するかを検討した。調査結果からは影響することが確認されなかった。ただし今回対象とした有群の調査協力者の数が十分ではなかったため、再検証する必要があるだろう。

参考文献

- (1) 寺内一・山内ひさ子・野口ジュディー・笹島茂(編): "21世紀のESP:新しいESP理論の構築と実践", 大修館書店(2010).
- (2) Shunk, D. H.: Self-efficacy and classroom learning, *Psychology in the Schools*, 22, 2, pp.208-223 (1985).
- (3) 伊藤崇達: やる気を育む心理学, 北樹出版(2007).
- (4) 石井研司: 英語リメディアル教育における協働学習, 事故効力感, メタ認知方略の関係性に着目した授業デザインの展望—自己調整学習の観点から, 言語教育エキスポ予稿集, pp.30-31 (2014).
- (5) 牧野眞貴: 英語が苦手な大学生の自己効力感を高める授業づくり, *リメディアル教育研究*, 8, pp.172-180 (2013).
- (6) 吉田晴世・松田憲・上村隆一・野澤和典(編): "ICTを活用した外国語教育", 東京電機大学出版局(2008).
- (7) Cavus, N. & Ibrahim, D.: Learning English using children's stories in mobile devices, *British journal of educational technology*, 43, 2, pp.625-541 (2017).
- (8) 重田勝介: 反転授業—ICTによる教育改革の進展, *情報管理*, 56, 10, pp.677-684 (2014).
- (9) 水本篤: 自己調整語彙学習における自己効力感の影響, *関西大学外国語学部紀要*, 第5号, pp.36-56 (2011).
- (10) 石井研司: アカデミックライティング授業において協働学習とピア評価が自己効力感に及ぼす影響—授業デザインのモデル化を目指して, 2015年度大学英語教育学会関西支部春季大会(2015).